

絨毛検査の結果は胎児の性別で左右されるか？

徐東舜

徐クリニック

【目的】絨毛検査の際に、母体細胞を誤って検査するリスクを伴っている。そこで今回我々は当院で行った絨毛検査の結果を後方視的に分析し胎児の性別による絨毛検査の結果に違いがあるかを検討した。

【対象】当院不妊外来で妊娠し、流産になった症例の中で流産精査を希望した方に、インフォームドコンセントを行い同意が得られた 243 (36.5±4.0 歳)に絨毛検査を実施した。

【方法】経腹超音波ガイド下に胎盤鉗子を用いて絨毛組織を採取した。採取した絨毛組織を G-band 解析 (ギムサ染色) して染色体異常の有無を診断した。性別は XX のみを女兒、XY のみを男児とした。

【結果】243 例中、7 例は検査不適となった (検査成功率は 97.5%)。全体の染色体正常の割合は 28.4% (169/237)、染色体異常の中ではトリソミーが最も多かった (78.1%)。流産胎児の男女の割合は 41.5% (88/212) vs 58.5% (124/212) で女兒の割合が有意に高かった。

男女児別での母体年齢、染色体正常の割合、染色体異常の中でのトリソミーの割合はそれぞれ  $36.4 \pm 4.4$  vs  $36.9 \pm 3.6$ 、26.1% (23/88) vs 35.5% (44/124)、93.8% (61/65) vs 88.8% (71/80) となった。いずれも有意差はないが、染色体正常の割合は女兒に高い傾向であった ( $P=0.15$ )。トリソミーの中では男女児共に 22 番、16 番、21 番の順で頻度が高かった。

【結語】流産児は女兒が多く、また女兒での染色体正常率も高い傾向にあった。以上の要因として絨毛ではなく母体細胞を検査している可能性が示唆された。